

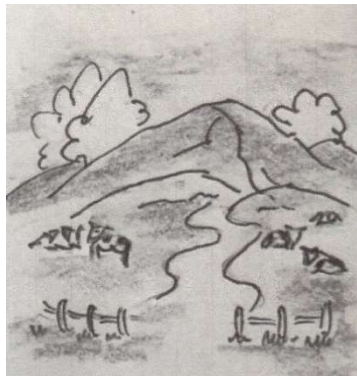
# 芥川だより

発行日 \* 2022年8月1日 e-mail: ab\_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸  
 発行人 下村嘉明  
 〒661-0951  
 尼崎市田能5-3-10-601  
 ☎090-8796-8624

\*\*\*\*\* 一部200円です \*\*\*\*\*



## あっけなく自信は消えた

えらそうに言ってきた私の自信がザックを担いで歩きまわったらあっという間にどこかに消えてしまった。明日からの山行に備えて装備を整理しザックに詰め込み担いで部屋の中を歩いてみた。肩にザックの重さが伝わる「おれが担ぐ重量をはるかに超えている。これを担いで山を登り続けたらトラブルを起こす可能性がある」と私は直感し大峯奥駈道の予定をキャンセルすることにした。

水場が少なく水量が不安定な尾根筋を歩くからどうしても多くの水は担がねばならない。4リットルでも少ないほうだ、酷暑の中ではもっと水が欲しいかもしれない。しかし、ザックに2リットルのボトルを2本入れるとずしりと重くなる。険しい100キロ尾根道を担いで歩く自信を簡単に消し去った。

こんな簡単なことは、昔から分かっているつもりでいたが、分かっていなかった。なんとも情けない自分を恥じる。さらに恥の上塗りをすれば、今回の山行は、コースタイムの倍のゆっくりしたペースで山を楽しもうと考えたが、山小屋も少ないので、食料等の量も倍になる。いくら軽量をしても限度がある。

頑張っているつもりでも、どこかに大きな問題を見逃している。分かっているつもりでも現実に直面すれば必ず見逃していた問題が露見する。その時に悔いても後の祭りだ。「懺悔 懺悔 六根清浄」と大峰の山伏修行者は唱えて峰々を回峰するが、私自身も冷静に心を落ち着かせ己の力を過信せず身に余る欲を出さずに生きていかなければならぬと改めて知らされた。

死をめぐるあれやこれ (93)

遠い夏の記憶

石川 吾郎

私の実家は岐阜市の長良川ぞいの、旧市街にあった。小学校の夏休みの午後は毎日、長良川で泳いだ。裸のまま家まで帰ってくと中庭の縁側に腰かけ、井戸で冷やしたスイカを食べて昼寝をした。毎年花火大会が二回あり、堤防まで出ると特等席だった。中学になると、天体望遠鏡で夏の星空を覗いていた。土星の輪に木星の衛星、こと座のリング星雲、白鳥の嘴の二重星アルビレオがお気に入りだった。宮沢賢治は「眼もさめるような、青宝玉（サファイア）と黄玉（トパーズ）の大きな二つのすきとおった球が輪になって静かにくるくるまわって」と書いてある。二階の窓の灯りにはカナブンが騒々しく飛び込んできて驚かされ、山のほうから、時を刻むようなヨタカの鳴き声が聞こえてくる。夏休みも終わりにころになると、庭にこぼしたスイカの種からは小さな実が生えてきたりもした。夜には蚊帳の中に庭のカネタキの声がかすかに聞こえてくる……。こんな夏は、記憶の中にしかもうない。

芥川だより一八七号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 93	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 101	坂本一光	2
哲学叢いの時事放談 51	祖蔵哲	5
大峰奥駈道 57	下村嘉明	7
オクラの山たより 71	因了生	7
隠された歴史 46	満田正賢	11
プロバガンダに騙されるな		
―学び直そう戦争と憲法の歴史 成瀬和之		13
俳句	土田裕	14
	影山武司	
	S K 生	
編集後記	山椒魚	14
ふみの道草 50		15

素老人☆よもだ帳 (101)

坂本一光

◆永遠の嘘を信じてくれ

川柳を始めて九年になる。おそらく五千句を越える駄句が累々としてあるだろうと思う。およそ千句に絞り、最終的に25

2句を自選した。三章を立て、一頁に三句を載せ、「あとがき」を入れても百頁足らずの小さな句集になる。世に問う価値があるか、いったい誰が読むかなどは問わない。今はただ、句集をつくる夢に浸っている。

第一章 方円に従う水にある非凡

水が水に浮く何の不思議もない不思議  
平凡という非凡水が水に浮く  
水に浮く水にだつてある秘密  
氷点下八十度で沸くはずの水  
摩訶不思議水地にあふれ命生む  
底知れぬ水が命をくるむ謎  
花も実も根も葉も水の美しさ  
空即是色水は命をかけめぐる  
色即是空いのちは水でできている  
ありふれた水に花咲く命咲く  
万物を命につなぐ水の星  
大方は塩水である水の星  
丸くなる四角にもなる水の知恵  
水の輪のまんまるまるい命の輪  
方円に従う水のような母  
地の隅隅潤す水に生かされる  
一滴の水に命もよみがえる  
方円に従う水が諭す雨  
温暖化一度で変わる水の貌  
温暖化一度で空の底が抜け  
ありふれた水が凶器に変わる夏  
百年に一度と言って明日も降る  
雨に無事ひたすら祈る水の星  
人が住む星でなくなるかも知れぬ

一滴の水が腕組み海は鳴る  
一滴の水が七つの海めぐる  
一滴の酒も涙も水の精  
一滴の水に命のビッグバン  
一滴の水に見果てぬ万華鏡  
一滴の水の彼方に大宇宙

第二章 万物の霊長などと言うジョーク

安全の神話が水に流される  
ふるさとの神も仏も溶けた水  
ありふれた水の怒りの汚染水  
メルトダウンありふれた水間に合わず  
凍土壁怒りで水が凍らない  
汚染水威風堂々希釈水  
再稼働地水火風の揺れる国  
フクシマも辺野古も解けず水温む  
土砂ドドド怒怒怒辺野古に返す波  
沖繩は怒りを水に流さない  
水温む水の怒りの解けぬまま  
万能の水にも解かせない怒り  
オンザロックロックの下の酒を飲み  
喜びも悲しみもあり水の街  
骨のない叙情を川に捨てにゆく  
水と塩ほかは命を食べるヒト  
瑞穂の国水より安い米づくり  
いただきます水のおかげのこの命  
水の輪のかたち残して初氷  
満身に水を湛えて角があり  
答えない問いばかりして水凍る  
名月と言うが灰色水が無い  
水の星川原の石も花のよう  
いるとどり地球の石は水の花  
朝露に輝きを増す蜘蛛の糸  
しみじみといのち水から生まれたか  
どこにでも水と平和はない地球  
海の向こうに何かがあると思つた  
どこにでも水と平和のある地球  
何(なん)もかも溶かして深くなつた海  
森羅万象人間というひとかけら  
骨のない叙情ばかりがいやになり  
平和とは限らぬ空の青い国  
戦雲の彼方に昇る春北斗  
名月の下に戦のヒト科ヒト  
草も木も人も火となり風となり  
夾竹桃咲いて戦のまだ止まず  
戦争も平和も知らず嬰(や)生まれ  
万緑のウクライナにも呱呱の声  
みどり児のいくさ平和も知らず這う  
戦争も平和も永久の問いのまま  
迎え火も時代の風に揺れ始め  
政権を投げた男のコントロール  
もつと右もつと右へと国の舵  
列島は面舵いっばい切つたまま  
国民の審判受けずなし崩す  
音もなく戦の前になる気配  
戦争の影がかたちになる前夜  
渋々も心ならずももうご免  
戦争は徐々に近づきあつと来る  
息子夫父まで鬼にする戦  
考える輩も悪魔になる戦  
大海原果てし一途の兵の夢  
一滴の戦死の涙ない戦後  
ありふれた平和は奇跡まだ戦後

二億年銀杏は銀杏変わらない

臆病で弱虫でいい平和主義

読みたい本観たい映画がある平和

憲法は素直に読めば美しい

殺すこと殺されることない平和

九条があれば平和もありふれる

九条の深い真の抑止力

大地水空気のようにある平和

九条の国が一番美しい

初日の出百寿の母の頬に紅

この胸の誇り戦を知らぬこと

一点の偽りもない保守の人

良心にのみ従うと生きた人

パンドラの箱開けたのは誰ですか

パンドラの箱飛び出した放射線

パンドラの箱漏れだした汚染水

パンドラの箱閉める術ない科学

考える葦も核解き放つまで

悠久の進化の果ての核武装

愚かなる葦の証しの核の傘

見せかけの高価な平和軍勢力

考える葦ではないと神嘆き

安らかに眠れと言うか核の傘

核の傘被爆の国が雨宿り

被爆国廃棄への窓閉じたまま

考える葦の証しへ核廃棄

ヒバクシヤもフクシマもまだカナのまま

ヘイタイもコメもデンキも出して過疎

フクシマも辺野古も同じ国のこと

屈しない沖縄の意志辺野古の海

素っぴんの島より怖い基地の島

ふるさとの神など捨てよ再稼働

帰れないふるさとづくり再稼働

付度が神風吹かす春の闇

付度の後ろの正面だーれだ

最弱点真つ正面の意外性

少数が多数になれば世が変わる

汝の敵愛する前につくらない

人間はまことに考える葦か

万葉の昔も今も青い海

戦争と平和に裂ける青い空

八月のあの青空にある答え

花は咲く戦に負けてからも咲く

戦せぬ国に桜も梅も咲く

花は咲く人は平和を思うもの

八月の遠くて近い鶴彬

永遠の嘘を信じてくれ友よ

第三章 しあわせは出会った人の

おくりもの

生きてゆく支点力点作用点

人間の無限十七音になる

自画像を十七音にしたためる

人間を撮る人間が撮る鬼が撮る

早咲きも遅咲きもいい人の花

人は古い真の花の顔になる

とんとんとん母のリズムで朝が来る

幸せの足し算をして母になる

お薬もお粥に混ぜて母介護

母百寿丸い背中を抱く介護

僕は誰分かれますかと母に問う

人のため生きて自分を生きた母

九条の根っこに生きている多喜二

向かい風追い風にする回れ右

ウイルスが暮らしの音を消して秋

コロナにも自粛はしない虫の声

失敗を隠す術なきマスク来る

疾風に勁草を知る新コロナ

誰ひとり取り逃がさないデジタル化

挫折にはヤリナオセルとルビを振る

天国と地獄では是正する格差

名月がうらやみ青ざめる地球

いい男みごとな虚像見せ生きる

意味などを問わずに死ぬまでは生きる

人間をうたうと笑いが生まれる

マルムシのようにときには寝たふりも

万物を愛しいのちをふくらます

一枚の画布抱き生まれ来るいのち

父も子も父の背中を見て育ち

七重の膝八重にも折ると鬼子母神

愚痴一つこぼさず母は飯を炊き

母の味愛があるから越えられぬ

亡き父の字引に残る句の迷い

騙されて騙す人よりいいと言う

沈黙の深さ教えてくれた父

そこにいたそれだけでいいそんな人

ケンケンパ昭和の声が消えた路地

一心不乱なくした言葉探す夜

あやとりの少女の指が夢を追う

立ち位置をここに定めて生きる巨樹

ごっこつこの道を自分で行く決め

何度でも人生新しく生きる

無限小知る人間の無限大

人の世を一句に映す万華鏡

空っぽの心に響くいい句です

椅子のほか倚りかからずとのり子の詩

つまりけば基本に返る人の道

主権者は黙っていても知っている

生きたのは八十からと笑う母

学校も港もいつか母になる

目立たずに生きる真もあると知る

気がつけば妻の味です母の味

悲しみの数だけ芯が太くなり

やさしさでくるめば芯は強くなる

こぼれ種咲いて私はここにいる

夕焼けに歩いた道をほめられる

この道のように曲がって春は来る

生きるのに苦手な人の手が温い

カセットに聞きたい君の声がある

もう会えぬ人を訪ねて句集読む

こどもの日来ればこどもになるわたし

少年の心のままに玉子焼

生きて逝く次の命の始まりに

人去れば神も仏もさびしそう

人は逝き遠くて近い人になる

人間はいつかわかればそれでいい

ラフカディオ・ハーンの街に育てられ

夜光虫ホタルと語るハーンの子

神々と遙かに望む出雲富士

新年は獅子の時代を夢に見る

永遠の嘘なら耳を傾ける

希望という名の電車なら乗ってみる

文明は人を孤独にする装置

文化とは孤独に耐えている力

オーロラを見てから世界観を変え

勇敢で強いばかりが善なのか

臆病で弱いばかりは悪なのか

考える葦の精神揺れている

世の中は真面目に見ると面白い

無口だと言う人の句がよくしゃべり

男振り決める余白のキャパシティー

店仕舞うように私を仕舞えない

雨を知る草にも生きているリズム

凜とした桃の固さが好きだった

転んだら起きればいいと言う笑い

ときどきは悪人面もしてみせる

マイナスもプラスも同じ線の上

この男未知数なのか変数か

要領もいい加減さも素敵です

大なる矛盾私が私超えられず

再結晶しない私を持て余す

超えようとしてはじめて見えてきた私

理不尽を許せとばかり日は沈む

心にはかたちがあるとと言う背中

優しさが熟成をするエイジング

ふるさとの山はとことん泣けと言う

生きていることも忘れて母百二

変らない景色の中で夢を見る

ふるさとの山は今でも見えますか

五七五詠んで私になるわたし

私をうたうと天動説になる

ザリガニもバツタもヒトも脱皮する

百花斎放人間図鑑五七五

生真面目に自分を笑う憤る

ピーカーの底に熟成する秘密

叶うなら鬼にも蛇にもなると言う

水府という凡柳という道標

王道を行くが道草し放題

非凡だと鬼が今夜もそそのかす

百葉の長に白寿と書いて飲む

雑踏の中の孤独に耳澄ます

平和とは今日も明日を語ること

生きる訳思いもかけず飛んだ蝶

本当に生きた日を問うすだく虫

桐一葉落ちて生への旅始め

ひらがなでそつときよならありがとう

生きてゆく心のかたち五七五

食べ飽きない李(すもも)のような君を抱く

人はみな銀河を生きるひとしづく

人間は人間であるリスペクト

あとがき

人が学ぶとはどういうことか。それは、

「人間はどう生きてきたかを知り、自分は

どう生きるかと問う」ことだと、大学で教

えながら私は学んだ。川柳を始めてから、

人と自然について学ぶ心と、五七五に私の

中の「わたし」をうたう心とは同じだと思

うようになつた。人と自然の深さ、不思議

さ、おもしろさを、私はやさしい言葉でう

たい続けたいと思う。

句集タイトル「永遠の嘘を信じてくれ」

―― 1963年8月、ワシントン大行進の  
最後に、後に暗殺されたキング牧師は「私  
には夢がある」と演説をした。夢や願いは、  
現実とは異なる。無力な者の夢や願いは、  
「永遠の嘘」であるかのように実現しない。  
それでも人は、夢や願いをあきらめずにう  
たうのではないか。  
第一章「方円に従う水にある非凡」――

水はあらゆるものを溶かして流動する。命

も命なきものも水に溶け、万物は互いが互

いの一部であるかのようにつながる。あり

ふれた水は直径1億分の3cmほどの小さ

な粒(分子)から成るが、この粒は電氣的

に強いプラス極とマイナス極に分極して

いる。水道の蛇口から水を糸のように垂ら

し、布でこすつたストローを近づけると曲

るほどだ。この電氣的な極性のため、水の

粒どうしは強く引き合つてつながる。水が

あらゆるものを溶かし、熱しにくく冷めに

くいのも、地球の気候が比較的温暖に保

たれているのも、氷が水に浮くのも、その

深いところには、ありふれた水が持つ特異

で非凡な性質、電氣的な極性の強さが関係

している。「ありふれたものに奇跡を

見なければ、奇跡はどこにも、永遠にな

い」――命を生み出す地球をつくり、何の毒

性もない水。ありふれた水の奇跡を、私は

折に触れうたつてきた。

第二章「万物の霊長などと言うジョーク」

―― ジョークなどと言えば、人類の不断の

営為を笑うのかと叱られそうである。しか

し、「人間はまことに考える葦か」と疑問

に思うことが多すぎる。誰もが願うのは安

全で安心な暮らし。戦争が無く、飢えが無

い、平和な暮らしである。世界は、このあ

たり前であつてほしい世界からどれだけ

英五がメジャーデビューする前のこと。レ

コードを買つたおまけのソノシート盤レ

コードに、彼が作詞作曲し歌つた「生きる」

という曲があつた。その歌の一節が今も忘

れられない。

出会つた人の数だけ

幸せになれるなら

歩いた峠の道のりだけ

優しくなれるなら

空には風 大地を流れる川

生きて行く限り 歩き続けるだけさ

幸せや優しさを、そんなふうに考えたこと

はなかつた。五七五の川柳ならどううたう

だろうと、今なら思う。

しあわせは出会つた人のおくりもの

一つ山越えてやさしさ深くする

人はみな銀河を生きるひとしづく

そうだ、大分県番傘川柳界の祖である内藤

凡柳先生もこんな句を残している。

生まれきた裸のほかは世のめぐみ

ありがたい世の中だと信じたい。

(かたちは心であり、心はかたちになる

大分の素老人)

## 「哲学命い」の時事放談(51)

祖蔵 哲

### 『テロの哲学』

先月号で、「地球環境問題」「感染症」

そして「戦争」、これらは人類誕生と共に発生していたものであり決して消滅しているものではないと話した。そして近代以降その異常さの速度が増しているだけと書いた。その直後の7月8日、またしても消滅していなかった事態が発生した。安倍元首相が第26回参議院選挙の遊説中に、背後から銃撃されて死亡した。「テロ事件」である。この事件をテロと呼ぶかは後に「テロの定義とは」で論議するが、日本では最近珍しい政治テロが発生したのである。

日本の歴代首相64人のうち、暗殺という形で死亡したケースはこれまでに6件あった。まず、初代総理大臣伊藤博文からして1909(明治42)年にハルビン駅で韓国の民族主義運動家から銃撃を受けて暗殺されている。そして高橋是清、斎藤実らが、1936年2月26日の「二・二六事件」で青年将校に暗殺され以後、今回は実にほぼ九十年間以来の事件である。首相暗殺事件はすべて戦前に起きているが、政治家を狙ったテロ事件は最近でもある。2007年長崎市長が市長選の選挙運動中に暴力団幹部に銃撃され死亡している。

日本でのテロ事件は珍しいが、世界ではテロ事件は日常茶飯事である。アフガニスタン、パキスタン、シリア、イスラエル、ナイジェリアなどではテロは頻繁に起こっている、さらに先進国、フランス、イギリス、ドイツにおいても頻発している。政治と宗教の対立、移民問題の関連が多い。

そして、折も折、この8月1日、アメリカのバイデン大統領は、武装勢力「アルカイダ」の現指導者アルザワヒリ容疑者をアフガニスタンにおいて対テロ作戦で殺害したと発表した。アメリカは2011年に前指導者のウサーマ・ビン・ラーディンも殺害している。「対テロ作戦」という名で殺人を正当化しているが、この事件の場合、犯行者は個人やグループではなく国家である。そういえば、現在のウクライナ戦争でもロシアはこの戦争を「作戦」と呼んで正当化していた。同じ発想である。

ある研究によれば、1960年から1990年に非国家テロによる被害が数千人台であるのに対して、国家テロによって被害された人々の数は二五〇万人に上るらしい。国家テロが圧倒的に人間を殺しているとい事実だ。今月は「テロとは何か」そして殺人、暴力を正当化する「国家テロ」を哲学してみる。

#### (1) テロか私的恨みか

安倍元首相銃撃事件が発生した直後

野党の政治家や一部の報道機関は、「民主主義が決してテロに屈してはならない」と「政治的テロ」非難の言動や報道をした。これに対して、これは独善的な政治理念といった「高尚」な動機ではなく、個人的な不遇の鬱憤を晴らす行動であり、2008年東京・秋葉原で起きた25歳の青年による殺傷事件と同じような「社会に不満を抱いた者の犯罪」とテロを否定する意見も多く出てきた。そして、政府はかたくなに安倍氏の政治的関与を否定している。果たして、一般人でなく政治家を狙った暗殺が全く個人的恨みだけというものがあるのだろうか。

戦前のテロ事件の多くは、「貧しさ」という社会性からの動機で起こされたものであり、その原因が政治であり、経済的利権への恨みであった。今回の事件も宗教と政治の癒着と利権が明白になっており「テロ」という他はないと思う。しかし、政府はなぜテロ指定に消極的なのだろうか。これは「国家テロ」の定義の場合も同じであると考ええる。

#### (2) テロとは何か

テロリズムとは、ある政治的目的を達成するために、暗殺、破壊、監禁や拉致などによる暴力的な手段で、敵対する当事者、さらには無関係な一般市民や建造物などを攻撃し、物理的な成果よりもそこで生ずる心理的威圧や恐怖心(テロ)を通して、譲歩や抑圧などを図るもので

ある。政治的意図をもつという意味では単なる暴力行為と異なるが、それらの目的には、政権の奪取や攪乱、外交的優位の確立、報復、活動資金、自己宣伝などさまざまなものがある。これらテロリズムを行う主体をテロリストといい、個人から集団、あるいは政府や国家などが含まれる。テロリズムの由来は、18世紀フランス革命期のジャコバン派の恐怖支配にあるとされる。

#### (3) テロの国際定義は合意されていない。

このような「テロリズム」に当てはまる事件は世界中で多発しているが、世界共通で使われている「テロリズム」の明確な定義はない。国連は、テロリズムを「一般市民、何らかの集団、特定の個人らを恐怖に陥れようと意図されたり計画されたりした、政治的な目的を持ち、どんな政治的、理性的、思想的、イデオロギー的、人種的、民族的、宗教的な状況を理由として用いても正当化できない犯罪行為」と定義しているが、加盟国の合意は得られていない。

「9・11事件」発生後、国連総会で「包括的テロ防止条約」が審議された際、パレスチナ人による対イスラエル抵抗運動をテロの定義に含めるか否かで、アラブ・イスラム諸国と米国・イスラエルが対立し、結局テロを定義することができなかった。また南アの反アパルトヘイト

運動やパレスチナ人の抵抗運動を含めるか否かも対立している。争点は、民族自決を求める活動を認めるかと、国家テロを認めるか否かである。それに対する、米国の態度は、占領への抵抗であっても政治目的の暴力行為は「テロ」と呼び、国家の正規軍の行為はテロでないというものである。まったく自国の都合によってテロを指定している。これは前回でも述べているが、「国家は暴力を独占する」という「国家権力＝暴力」の構造から来るものである。

#### (4) テロの定義の困難さ

テロの定義が国際的に合意されないのは三つの理由が考えられる。

まず、第一はテロと定義する必要性である。つまり、ある事件をテロと指定するのは何を目的にするのかという場合である。ある事件をテロと指定する目的が「テロ防止」という取り締まりになれば、その予防処置が拡大されても合意が得られ、規制が容易になる。一方では、合法的ストライキなども制限される危険性を伴う。

第二は、事件の政治性の評価の相違である。例えば、パレスチナ闘争とそれに対するイスラエルの弾圧についての評価の場合。パレスチナ人民の闘争を、民族解放のためのやむをえざる手段と考えるか、許されざるテロ行為と考えるかによって、それをテロに含めるか否かが違ってくる。アメリカ、ロシア、イギリスな

ど各国は自国の政治体制を脅かすグループをことごとく「テロ組織」に指定している。

第三の理由は、テロやテロリストという語が強い否定的含意になっているからである。

アメリカはイラク、北朝鮮、イランなど自国の「テロ指定国家」を「ならず者」という比喻を用いている。これは、米国にとり好ましくない国に「悪」のレッテルをはる世論操作の機能を果たしている。

要するに「テロという定義」がそれを定義する側の立場によって自己都合で使われるからである。「テロ」という語が政治性を含むゆえの問題であり、現代の政治が「絶対的正義」でなく「相対的正義」をめざし作り出しているからゆえの問題であろう。

#### (5) 暴力を定義する力としての「国家権力」

「安全」という概念は、「〜である」と肯定的に定義することはできず、「脅威や危険がないこと」、まさに「恐怖＝テロがないこと」という否定的定義しかできない。国家が、国内外の暴力の脅威に対して自らが振るう独占的暴力を正当化するために使われるのが「予防対抗暴力の論理」である。すなわち国家は、安全を脅かした暴力への懲罰、あるいはその可能性のある暴力への抑止として、自己の暴力を正当化する。つまり国家は、排除す

べき暴力を定義することによって、自己の暴力を、脅威を予防するためのやむをえない暴力として正当化するのである。こうして国家は、暴力だけでなく、排除すべき暴力を「定義する力」を独占することになる。これが「国家権力」といわれるものである。

#### (6) 民主主義社会でのテロ

今回の安部暗殺事件については、犯行が参議院議員選挙遊説中であつたこともあり、『民主主義を破壊する行為だ』という非難が語られている。現在のところ犯行の政治目的が不明確なことから政府はこの事件を「テロ指定」することを避けているが、これはどうも政治性があるのを隠す目的があるようだ。しかし、さらに調査が進んでその政治性が明白になればテロと指定することも考えられる。その場合の目的は「予防対抗」である。テロリストは言論の自由、行動の自由を前提とする民主主義社会を最大限に利用して、暴力と恐怖により自己中心の世界を作ろうとする反民主主義的存在である。しかし、権力がこのようなテロをなくすという「予防措置」として民主主義を制限するという反民主主義的な状況を作り出す方がよほど危険である。ワイマール体制という当時、世界で最も民主主義的と言われたドイツがヒトラーのナチス政権が誕生を許したもののこのような状況であつたらう。権力が指定する暴力や安

全の定義に我々はもつと敏感になるべきであろう。十分な議論がないままに成立した「国家機密保護法」や「平和安全法制整備法」などは民主主義国家にとっての脅威となる可能性がある。

#### (7) 国葬の反民主主義性

政府は凶弾に倒れた安倍元首相の葬儀を今秋に「国葬儀」の形式で行うと発表した。戦前には、岩倉具視や山本五十六のほか、伊藤博文など軍人、首相経験者の「国葬」が営まれてきたが、戦後に国葬が行われたのは1967年の吉田茂氏のみである。今回の国葬の理由は長期政権の維持、政治実績、国際的評価らしい。そして国葬の意義を「故人を追悼するとともに、わが国は暴力に屈せず、民主主義を断固として守り抜く」と説明している。政治実績やその評価については疑問も多い政治家であり、多くの問題点を積み残したままである。これにより世論は分断されている。とても国民が納得するものではないことは明白である。しかし、それ以上に問題なのは「民主主義を守る」ために国葬をするという理由である。民主主義とは権力者の独断や形式的な多数決ではなく、議論と納得による大多数の合意である。何の議論もなく、国民の過半の賛成もない事柄を強行決定することは「反民主主義」である。「暴力に屈せず」といって暴力的権力を行使する。これがテロ定義の恣意性である。



体験型人間学 7

人は互いに影響を受けながら生きていく。幾つになっても腹は立し涙がこみあげてくることもある。毎日、現場に立つといろんなことを経験する。一番困るのは、歩くのもままならぬ老人に仕事の指図をしなければならなかった時だ。その人は、2カ月前に警備員になったと元氣な声で言うのだが、いざ歩くと見るに見かねないよちよち歩きになる。話を聞けば、足腰が痛いと言う。もう仕事を休んで家に帰り養生したらと言いたくなる有様だ。その人は、その人の事情があって仕事に出てきているのだから、余計な事は言わないに限る。

その時は、もう一人の老人もよぼよぼで車が走る路上に立たせるのが怖かったので、比較的安全な所に立っているように指示をした。もう少し元氣な人を採用して欲しいと思いつながら、こんな体の状況でも働かざるをえない事情を推察する。よちよち歩きの老人と話をする機会があったので、少し話をした。足腰に即効薬の漢方を持っているのでよければ差し上げますが、という通っている医師からも同じ薬をもらって飲んでいるが少しも効かないと言う。彼の姿を見ると憐れみを感じる。やせ細った小柄な姿から、

かなりの年齢かと思つたが、私よりも若い70歳であった。よほど苦勞を強いられた人生かと思えてきてかわいそうでならなかった。しかし、その歩きぶりから、簡単な仕事さえ時間がかかり苛立つてくる。

人間はどこまで優しくなれるのだろうか。理屈と現実ではかなり違う。自分に負担が強いられ精神的・肉体的な苦痛を受けるからである。特に契約者である会社の担当者に対しては矛盾した態度が必要になって来う。よちよち歩きの老人でさえ「彼は頑張つて仕事をしてます」と事実とは違う嘘をつかねばならない。本当の事を言えば、彼には仕事が回ってこなくなるから、彼をかばうしか方法はない。

## オクラの山たより (71)

困了生

すでに祇園祭のピークである山鉾巡行も終わって本格的な夏となり、いささか季節はずれの話題となりましたが、川魚といえばまず鮎と連想される方は多いこと

でしょう。東アジア全体に生息している鮎は日本人だけが愛好しているというわけではないのですが、日本では古代以来さまざまな詩歌に詠まれてきました。「万葉集」には魚の歌が三十二首ありますが、そのうち半数の十六首が鮎です。いかに万葉人が鮎好きだったかが分かるとういものですが、その大半が大伴旅人とその子の家持の歌なのです。ただし、お二方とも食べる方にはあまり関心がなかったらしく、旅人は若鮎のピチピチした姿を美しい乙女に重ね、家持は鵜飼に興趣を抱いたようです。つぎのAは大伴旅人の歌でBは家持の歌です。

A 松浦川(まづらがむ川の瀬早み紅くれない)の裳の裾(すそ)濡れて鮎か釣るらむ

卷五の八六一

(松浦川の川瀬の流れが早いので、娘たちは紅の裳裾をあでやかに濡らしながら鮎を釣っていることだろうか)

松浦川は、その昔、神功皇后が鮎を釣つたと伝えられる伝説の地「松浦川」で現在の玉島川です。鮎釣りに興じている美しい乙女。燃えるような紅の裳裾から白い素足がチラリチラリと見えている。健康な色気を感じさせる幻想的な一首です。

B 鵜川(うがわ)立ち、取らさむ鮎の

しが鰭(はたは) 我れに削(か)き向  
け 思(おも)ひし思(おも)はば

卷十九の四一九一

(私が贈った鵜でお捕りになる鮎。もし、あなたが私のことを相変わらず思つて下さっているならば、せめてその尾ひれくらいは感謝の気持ちとして贈つて下さいな)

「鵜川立ち」とは「鵜飼で魚を捕る準備をする」の意で「しが鰭」の「しが」の「し」は鮎をさす指示代名詞です。また「鰭」は「ひれ」ですが鮎は小魚ですから、この歌では尻尾のことでしょうか。「削き向け」とは「切つて贈る」の意です。

ある年の五月中旬のこと。まもなく鮎の季節が到来する頃です。作者は長年の歌友である大伴池主(越前国の地方官でした)に歌を添えて鵜を贈りました。「この鵜は優秀だから鮎をたつぷり捕つてくれるぞ。あまりにも沢山捕れるので、お前さんはきつと涙を流さんばかりに感謝をせずにはおられまいよ」と冗談めかしたものです。こんな歌ができるのも家持と大伴池主とがかなり親しい間柄だったからでしょう。

もちろん、鮎は古代の人も好物であったとみえ、藤原宮跡や平城宮跡から数多く発掘される木簡から「年魚(あゆ)」「鮎」「醬(脾塩)ひしほ鮎」「酢年魚」「煮干鮎」などの記述が見えます。「醬鮎(ひしおあゆ)」とは鮎の内臓の塩辛で現代でも

珍重される「あゆのうるか」のことだと考えられます。古代以来、鮎は様々に料理されて日本人の舌を満足させていたのです。

時代は下って江戸時代となると上流の人々だけでなく街の人々も鮎料理を楽しむようになります。

近世の料理本「料理物語」に鮎の項で「膾(なます)「せこしなます」のこと、汁、刺身、焼き物(塩焼き、田楽など)、かまぼこ、白干し」とあり、さらに塩引きにして「酒浸(ひて)、うるか、煎り酒」といろいろ記しています。どんな料理か想像がつかないものもありますが、多種多様な鮎料理を楽しんだのでしょう。

あの俳聖芭蕉も鮎を楽しんでいます。場所は岐阜の稲葉(金華)山のももと、長良川のほとりで席を設けて弟子たちと鵜飼いを楽しんだおりです。鵜飼いを待つ間、木陰で鮎膾(あゆなます)を肴にして酒宴をしました。宴会は大いに盛り上がって芭蕉は次の句を詠みます。

① またたぐひ 長良の川の 鮎膾

「鮎膾」は鮎を背骨ごと薄く輪切りに切つて(背越にして)酢であえたものです。「またたぐひの長良」は「又たぐひ(類)なからむ(比類のないすばらしいものだらう)」に「長良」を掛けた表現。句意は「鵜飼で名高い長良川の鮎膾は、またと比べるものがないほどのよい風味であ

る」となるでしょうか。この時の鵜飼いは見物のさいに有名な次の句が生まれま

② おもしろうてやがて悲しき 鵜舟かな

鵜舟が目の前から消えて闇の世界へと遠ざかっていきます。そこは水の音・風の声のみが聞こえる幽寂の世界。華やかな鵜飼が果てて全てが闇の世界に溶け込んでいく悲しさに芭蕉は感動したのでしょ

う。余談とはなりますが、筆者の生まれ故郷に近い愛知県一宮市から出た江戸末期の漢詩人森春濤十五歳の作に岐阜の春を詠んだ漢詩がありそこに長良川の鮎が詠み込まれています。原詩の後に書き下し文、口語訳を記します。

岐阜竹枝二首 その一

環郭皆山紫翠堆  
夕陽人倚好楼台  
香魚欲上桃花落  
三十六湾春水来

郭をめぐるはみな山にして紫翠うずたかく  
夕陽人はよる 好楼台  
香魚のぼらんと欲して 桃花落ち  
三十六湾 春水来たる

「山々が待ちを取り囲み、山肌が紫と翠(みどり)とを盛り重ねたような色合いを見せる中、夕陽に照らされた美しい高樓の欄干

には人が寄りかかっている。鮎は遡上をはじめ川面には桃の花が散り落ちている。長良川の多くの入江に春の雪解け水が流れ来るころとなった」

「自然と人事」「山と川」「上ると落ちる」と対句をちりばめ伝統的な「山紫水明」「桃花流水」の趣を律儀に詠み込むあたりは十五歳の少年の詩であると感じさせますが、その詩のもつ風格は後年の大詩人の片鱗をうかがわせます。蛇足を重ねるついでに一言。この森春濤の子が明治の漢詩人森槐南です。

二

さて、芭蕉の句、森春濤の漢詩、いずれも岐阜長良川の鮎に関わる作品ですが、当時あつて京の地で鮎といえど何といつても嵐山の大堰川(大井川ともい嵐山より上流は保津川、嵐山より下流では桂川といった)と宇治川が有名でした。蕪村も人に劣らず鮎は好きだったようです。

③ 鮎くれて寄らで過ぎ行く夜半の門

という句があります。この句は親しい友人が釣りの帰りに活鮎を届けてくれたのでしょうか。すぐ料理できるように、挨拶もそこに立ち去ったようです。押しつけがましくない親切や思いやり、そして作者の感謝の気持ちがかもる一句で

す。蕪村の住居は四条烏丸界限でしたから、この友人は鴨川で鮎を釣ったのでしょうか。

実をいえば、この句は一七六八(明和五年)六月二十日の句会での句です。この句会での蕪村の他の作品を紹介すると

④ 腹あしき僧こぼしゆく施米かな

腹を立てた僧侶が施米をこぼしていく、さつきもらったばかりの施しの米なのに、といった句意で僧侶が悟りきれぬことを揶揄した句です。ユーモアもあつて④の句もおもしろいですが、わずかに毒が感じられます。この句に比べれば③の句は清々しさも残る佳句です。

しかし、③の句が実際にあつた出来事にもとづいて作られていると考えるのは早計です。この句も蕪村の句作りに多くある手法、つまり中国の古典や日本の古典を踏まえて作られています。

六朝時代の晋の人、王子猷(おうしゅう)は雪の降つた後の月晴れやかな夜、友の戴逵(たいき)を訪ねて共に遊ぼうと舟を仕立てて来ましたが、その門前に着いたときにはすでに興味が尽きて、そのまま引き返した、という「世説新語」にある故事はよく知られていました。この故事を下に置いて雪の夜を夏の夜に転じ、鮎を友情の証しとしたところが句の趣向でしょう。

使われている故事はそれだけではなく



「徒然草」の一七七段にある「物くるる友」を良き友の筆頭とした話も踏まえています。鮎をくれた上に黙って去っていく。そんな爽やかな友ならば最高だよ、と句会の場での笑いを誘ったに違いありません。

### 三

鮎に関する蕪村の句には他に次の句があります。

#### ⑤ 鮎落ちて焚き火ゆかしき宇治の里

蕪村の死の前年である一七八二(天明二)年の作。「鮎落ちて」は産卵を終え力尽きた鮎が川を落ちるように下っていくさま。「落鮎」は秋の季語です。なお「鮎」一語だと若鮎が連想されこれは夏の季語。⑤の句意は「晩秋の落鮎の時節、焚き火のぬくもりに人恋しさがつのつてくる宇治の里よ」です。門人の嘯山が詠んだ「その業(わざ)の宇治の汲み鮎(くみあゆ)や暮るる迄」の後の風景でしょう。「汲み鮎」は鮎を網の中に追いこんで柄杓などですくい取る漁法。今は見かけぬ漁法ですが、江戸期には盛んにされていたようで一七八〇(安永九)年刊の「都名所図会」にも「宇治川の鮎汲み」と紹介されています。嘯山の作との関係から見ると⑤の句もおそらく実体験にもとづいた作ではないでしょう。

とはいえ「宇治の里」と蕪村の関係は

まったくなかったわけではありません。一七八三(天明三)年の秋、最晩年の年に蕪村は門人たちとともに宇治に出かけており「宇治行」という文章も書いています。もともと蕪村が行ったのは宇治橋や平等院のある宇治の市街地ではありません。行ったのは現在の宇治市の東側にある宇治田原町です。



「都名所図会」のうち「宇治川の鮎汲み」の図

天明三年九月、六十八歳の蕪村は一門の人々とともに宇治田原に住んでいた門人の奥田毛条(宇治田原の豪農で九代目奥田治兵衛重義のこと)に招かれ、一日キノコ狩りを楽しみました。その折りのことを記したのが俳文「宇治行」です。この作品で宇治田原でのキノコ狩りの楽しさ、宇治川べりの高尾の峰の鮎汲み、

米浙(こめかし)の急灘(きゅうたん) 早い川の流れること」と、晩秋の宇治の別天地の佳景を蕪村は描いています。

以下、文章の流れにそってその内容を紹介していきます。

#### 宇治山の南、田原の里の山深く

茸狩りしはべるに、若きどちはえものをむさぼり、先を争ひ、余ははるかにおかれて、こころ静かにくまぐま探し求めるに、菅の小笠ばかりなる松茸五本を得たり。あなめざまし、いかに宇治大納言隆国の卿は、平茸のあやしきさは書いとめ給ひて、など松茸のめでたきことはもらし給ひけるにや。

#### ⑥ 君見よや 拾遺の茸(たけ)の 露五本

宇治山は宇治市の東のある山。「我が庵は都のたつみ 鹿ぞすむ 世をうち山と人はいふなり」の歌で有名な喜撰法師が住んだところで、別名を喜撰山といえます。宇治田原はその南に位置します。

この宇治田原まで六十八歳の蕪村がいかなるコースで行ったのかは定かではありません。四条烏丸あたりの彼の居宅から宇治田原までは片道二十キロ以上はあります。江戸時代の人の脚力はもちろん現代人のそれとは比較にならないですが、六十八歳の老人に可能であったかど

うか。蕪村は宇治田原行きの前日に大津の幻住庵におり、瀬田川ぞいに南下し宇治田原の地に至ったのではないか、という説もあります。自宅から出発したのか、大津から瀬田川ぞいに南下して行ったのか、いずれにしても確証は何もないのですから好きに想像するほかはありません。

若い人たちは先を争ってキノコを採り蕪村は彼らとははるか後からついていったのですが、心静かにすみずみまで目をやると何とすばらしい松茸を五本も採ることができました。宇治大納言源隆国は「宇治拾遺物語」巻一「丹波国篠村に平茸の生じること」で不浄説法をした僧侶が平茸に生まれ変わったという話は書きとめているが、どうして松茸の素晴らしさを書かなかったと少し浮かれた気分を記しています。そこで「どや顔」で二句。

### 四

「宇治行」の続きを読んできましよう。

最高頂上に人家見えて、高ノ尾

村といふ。汲み鮎を業として世わたるたよりとなすよし。茅屋雲に架し、断橋水に臨む。かかる絶地にも住む人ありやと、そぞろに客魂を冷やす。

⑦ 鮎落ちていよいよ高き

尾上(おのゑ) かな

「高ノ尾村」は今の宇治田原町高尾(こう)です。宇治川の南岸、宇治田原の中心地から二キロほど北に位置します。その地人は汲み鮎を業としていました。高尾からすこし下ったところにある天ヶ瀬ダムあたりにあった志津川の渡し場から二町ほど上流に鮎汲み場が当時あり有名でした。そこでは大量の鮎がとれたと記録にあります。「断橋」とは途絶えた橋のこと。宇治川にかかる橋が木々の向こうに見え隠れしているのです。高尾は山の中腹にある高台の集落で、宇治田原の隠れ里といわれ志貴皇子、弘法大師や近江源氏など多くの伝承のある地です。集落周辺からは京都の市街地や遠く生駒山方面まで展望することができま

す。蕪村はこのようなところにも人は住むのかとかなり驚いたようです。

⑦の句は「流れ下ってくる鮎を川辺で見ればいよいよ高く見える山の峰だ」という内容でしょう。「鮎落ちて」

の「下る」と仰ぎ見る山頂の対照的な句法です。「宇治行」をもう少し続けます。

米かしといへるは、宇治川第一の急灘にして、水石相戦い、奔波激浪、雪の飛ぶが如く、雲のめぐるに似たり。声山谷に響きて、人語を乱る。「銀瓶乍(たちまち)破れ水漿迸(ほとぼし)り、鉄騎突出して刀槍鳴り、四弦一声帛(きぬ)を裂くが如し」と、白居易が琵琶の妙音を比喻せる絶唱をおもひ出でて、

⑧ 帛を裂く 琵琶の流れや

秋の声

「米かし(米漸と漢字では表記されま

す)」は「米を水で洗い、とぐ」ことです。

「米かし」は現在天ヶ瀬ダムがあるあたりに位置し、その場所には川の中に急流

がつくったくぼみがあつて人々はそれを

「釜」に、そして、その中で流れに翻弄

されている小石を米にたとえて「米かし」と呼んでいたようです。「宇治川兩岸一

覽」(1890(万延元)年刊)には「米か

しは志津川あたりの) 鮎汲み場の上にあ

り、急流巖にあたり白波みなぎりおこつ

て、その光景あかかも米を洗ひ漸(か)す

がごとし」と記されています。

また、江戸後期に出版された「都名所

百景」に「宇治川出合下ノ米かし」には

志津川と宇治川の合流点で激しく川波が

逆巻いていて「水石相戦い、奔波激浪、

雪の飛ぶが如く」というさまが描かれて

います。この急流の水音が山の谷間にこだまして人の話し声も聞こえないほどだ、と書いていますが、これは実体験からの表現だと考えられます。



「都名所百景」のうち「宇治川出合下ノ米かし」

山谷に響く音から漢詩文好きの蕪村は白居易の「琵琶行」を連想します。「銀瓶乍(たちまち)破れ水漿迸(ほとぼし)り、四弦一声帛(きぬ)を裂くが如し」と文中にはありますが、正確には

銀瓶乍(たちまち)破れ水漿迸(ほとぼし)り

鉄騎突出して刀槍鳴り

曲終り撥(ぼち)を収めて心(むね)に当

りて画(えが)く

四弦一声帛(きぬ)を裂くが如し

となります。この部分現代語訳を武部利

男さんの訳で紹介しています。「」は詩句の切れ目です。

しろがねの かめ たちまちに われて  
しみずが ほとぼしる / てつの あらむ  
しゃ おどりする かたなど やりと うち  
ひびく / きよくは おわつて ばち お  
さめ むねに おおきく わを えがく /  
よつつの いとが ひとこえに びりりと  
きぬを さいたよう

いうまでもなく⑧の句は激しい流れの音を「琵琶行」に描かれた琵琶の音になぞらえた作品です。

五

この宇治田原に遊んだ直後の九月十七日、蕪村は宇治田原の奥田毛条に御礼の書簡を出しています。「生涯の覚えなき業しみ、言語に尽くすところ御座なく候」と手放しの喜びようと帰洛後も元氣な様子を伝えていきます。

しかし、十月三日の加賀の俳人であった二柳(じりゅう)への書簡では次の記述があります。

愚老このほどは持病の胸痛にて、甚だ困り申し候。大かた天年も尽くし候故、やがてアツチものと覚悟いたし心細く候。

「天年」は「天寿、寿命」のこと、「アツ

チもの」とは「あの世行き」に意です。蕪村は宇治行きの後、急速に体を弱らせ病に伏すようになります。そして十月五日付の正名宛の書簡でも

愚老も此の程は持病の胸痛、よほどこまりはて申し候。

と書いています。さらに十一月十日付の几董宛の書簡では次の通り書かれています。なお、この書簡は年代がはっきりと確定できる最後の手紙です。

此のほどはお尋ねに預かり、ことに薬剤のことなど御心添え、病勞を慰め候。今しばらく見合わせ候て、桂附の力をもって復常願ひ候。今日はちと腹のかげんもこころよく候故、見合わせ候。

と書かれています。「桂附」とは「肉桂」のことで寒冷から起こる腹痛などに用いる薬です。胸の痛みから徐々に腹の病へと進行していったことがうかがわれます。

蕪村の死は十二月二十五日未明のこと。几董の記した「夜半翁終焉記」によれば晩秋のころには「何となく気力安からず、腹痛老身を苦しめ、日毎に悩みがちになりければ」という状況となり、十二月の半ばとなると「病毒下痢して……食欲欲することなく、心身倦みつかれて、

日毎にたのみ少く見えける」となり死に至りました。

宇治行きをした後に蕪村が京の地を出て遠出をしたという記録はないので、おそらく、この宇治でのキノコ狩りが蕪村にとつて最後の楽しい記憶であったでしょう。

自分の住んでいる宇治の地が蕪村の最後を締めくくる楽しい思い出の地であるとすれば、うれしくもあり悲しくもありと、少しく複雑な気分にもなります。

## 隠された歴史(46)

満田 正賢

今回は、蘇我入鹿が暗殺され蘇我本宗家が滅亡した乙巳(いっし)の変は、九州王朝による蘇我本宗家からの権力奪還の戦いだったという仮説を、今まで「隠された歴史」の各号で考察した内容を元に検証したいと思います。

六世紀後半から七世紀前半にかけての隠された歴史を探る上で最も重要な人物は蘇我馬子です。日本書紀では、蘇我馬子は敏達元年(五七二)に大臣となり推古三十四年(六二六)に没したとされま

す。なぜ蘇我馬子が重要かというと、第一に蘇我馬子は、日本書紀では近畿天皇の臣下として描かれており、万世一系の近畿天皇家による日本支配という歴史創作のために日本書紀によって作り出された人物とは考えにくいからです。第二に、日本書紀にも扶桑略記にも蘇我馬子が作つたと記されている法興寺が、飛鳥寺跡発掘調査で現在のいわゆる「飛鳥寺」の位置にあつたことが確実視されており、蘇我馬子の存在は考古学的な裏付けを伴うものであるからです。この点については前回「隠された歴史」(45)で触れましたが、蘇我馬子と法興寺(飛鳥寺)の存在を否定する意見は今のところありません。

次に、蘇我馬子が九州王朝の臣下であつたという想定について説明したいと思います。通説学者は、蘇我馬子はヤマト王権内の有力者として捉えています。しかし、この時期に近畿天皇家が存在していたかどうかは別にして、日本全体が九州王朝の名目的支配下にあつたことは、聖徳太子の伝記類や善光寺縁起等多くの寺社縁起に九州年号が用いられていることによつて証明されます。九州年号について、「隠された歴史」(5)(7)で触れていますのでご参照下さい。

蘇我馬子が近畿における実力者であつたとすると、九州王朝と蘇我馬子(蘇我本宗家)との関係が説明されなくてはなりません。私は、蘇我氏(蘇我稲目)を初

めて大臣に起用した宣化天皇の嫡男(＊古事記に倉之若江王と記された人物。日本書紀では倉稚綾媛という皇女に書き替えられている)が那津官家(なのつのみやけ)に遷都し後期九州王朝(筑紫天皇家)を立ち上げた時点で、近畿に残つた蘇我氏が自動的に後期九州王朝(筑紫天皇家)の臣下となつたと考察しました。後期九州王朝とは、倭の五王から続く磐井王朝が磐井の乱で滅亡し、その後、宣化紀に「全国の富を集める」という詔が出された那津官家に宣化の嫡子が遷都し後期九州王朝(筑紫天皇家)を立てたという仮説です。詳しくは「隠された歴史」(8)(23)(24)をご参照下さい。

一方、「蘇我王国論」(三一書房)の著者である山崎仁礼男氏は同書の中で同じく蘇我氏が九州王朝の重臣であるという見方を示しましたが、山崎氏は、磐井の乱のあと九州王朝が宰相である蘇我氏を近畿に派遣し、継体王朝を滅亡させて、近畿が実質的に蘇我氏の支配下に入ったという見方をとりました。しかし、蘇我氏が九州(磐井)王朝の宰相であつたという仮説には有効な論拠が見出せません。山崎氏を始め古田史学の多くの論者が卑弥呼の時代から旧唐書にある倭国と日本国の交代の時期まで九州王朝が一元的につながっていると考えていますが、この考え方は、通説学者の近畿王朝一元説と同じ間違いに陥る危険性があると考えています。



次に、山崎氏が「蘇我王国論」の中で展開した日本書紀造作の仮説をご紹介します。山崎氏は、日本書紀の造作を、実在した人物の地位（立場）の造作という視点で捉えています。具体的には、用明天皇、聖德太子、広姫皇后（\*敏達妃）、押坂彦人大兄皇太子、舒明天皇、皇極天皇の地位（立場）を造作と見做しています。山崎氏の主要な論証は以下です。

① 日本書紀の中の推古紀と敏達紀の矛盾。推古即位前紀に記された推古天皇の略歴「十八歳にして、淳名倉太珠敷（敏達）天皇の皇后となる。三十四歳にして淳名倉太珠敷天皇崩りましぬ。」の年齢と推古紀三十六年の「天皇崩りましぬ。時に年七十五」で計算すると、敏達天皇の没年が敏達紀の記すそれと二年違い、推古立後の年は敏達紀と五年違う。即ち、用明在位二年と敏達皇后広姫の死去（敏達五年）を省けば整合がとれる。

② 推古の即位時期については、推古即位前紀の推古立后と敏達即位とが同時とすれば丁度成立する。さらに『古事記』では推古が后妃の筆頭者であり広姫は三番目に書かれている。『古事記』においては敏達の正妃は推古である。

③ 敏達の葬儀の異常な遅れ。書紀は敏達の葬儀を崇峻紀四年に記しているが、敏達の死は敏達紀十四年（五八五）なので、崇峻紀四年（五九二）では六年後の葬儀となる。しかも母の石姫の墓に合葬である。一方、用明天皇は用明紀二年（五

八七）に亡くなり、死の三ヶ月後に葬儀が行われている。その時点で敏達の葬儀はまだ済んでいない。用明の葬儀を実際には敏達の葬儀であったと考えるとつじつまが合う。

「広姫皇后が敏達の最初の皇后であり、その子押坂彦人大兄が皇太子となり、その子である舒明、その妻である皇極が次々と天皇となったという記述は、日本書紀が天智・天武王系の美化の為に造作したものである」という山崎氏の考察は、日本書紀は何のために作られたかという問いかけにダイレクトに答えられるものとなっておりますので、私はこの山崎氏の考察は正しいと考えます。

山崎氏は、欽明天皇家は推古で終わったと論じています。それでは推古崩御のあとの近畿はどうなったのでしょうか。日本書紀には、蘇我入鹿が天皇然として振る舞ったと記されており、それが近畿における当時の権力の実態を反映した記述であることがうかがえます。蘇我馬子の時代は馬子が作った推古天皇（欽明天皇家）と馬子の二頭政治であったと考えられますが、推古天皇の死後、権力は蘇我入鹿（蘇我本皇家）に一極集中したものと考えられます。

それでは乙巳の変の本質は何でしょうか。古田史学の会編集長の大原重雄氏は、中大兄皇子と中臣鎌足が登場する蘇我入鹿の暗殺場面は、史記の中にある荊軻による秦王政（\*後の始皇帝）の暗殺場面

を借りた作文であり、中大兄皇子と中臣鎌足が出会う蹴鞠の場面や中大兄皇子が倉山田麻呂の娘を娶る経緯の記述は、三国史記、三国遺事にある新羅の金春秋と金庚信の記事（\*金春秋は大化三年（六四七）に来日している）、直接話を聞いた可能性がある）の借用であると述べています。乙巳の変に関する日本書紀の記述が全くの作文であれば、乙巳の変の真実は別にあると考える事が出来ます。

舒明、皇極が天皇ではなかったとすると、皇極の弟である孝徳も、舒明・皇極の子である中大兄も（欽明天皇家の）天皇となる資格もありません。本来の天子は筑紫（大宰府）にいる九州王朝（筑紫天皇家）の王です。そして近畿にいる勢力は、本来九州王朝（筑紫天皇家）の臣下です。孝徳・中大兄を中心とするグループは、天皇然として振る舞う蘇我本皇家を倒し、九州王朝（筑紫天皇家）の実質的な王権復活をなしたのではないのでしょうか。

なお、乙巳の変には九州王朝から直接派遣された人物が絡んでいた可能性もあります。「隠された歴史」（41）では、孝徳期に右大臣となった大伴馬養が九州王朝から直接派遣された人物ではないかと考察しています。

それでは、九州王朝（筑紫天皇家）と孝徳・中大兄グループとはどのような関係をもっていたのでしょうか。孝徳や中大兄は、山崎氏が考察した架空の天皇系

図につながっていますが、その出発点は敏達の架空の皇后として記された「広姫皇后」であり、その父親は息長真手王です。息長氏は近江の有力豪族であり、神功皇后（息長足姫）を輩出した氏族とされ、又その中興の祖は仁徳天皇の皇子若野毛二俣王の子・意富富杼王だとされます。釈日本紀が取上げた上宮記逸文では、継体天皇はこの意富富杼王の孫とされています。なお、本朝皇胤紹運録も同じ系図を載せています。允恭天皇の皇后で安康、雄略両天皇の実母である忍坂大中姫は、意富富杼王の同母妹となります。

この系図の真偽は別にしても、後期九州王朝（筑紫天皇家）を作り出した継体―安閑―宣化の系統は、大和の豪族にとつては外様であったことは間違いありません。一方、蘇我馬子は、推古天皇に対し大和の有力氏族であった葛城氏の支配地を自分の本拠であると言っていることから、大和の豪族の中心的存在であったと思われる。後期九州王朝（筑紫天皇家）と孝徳・中大兄等が、近江に拠点を置く息長氏を通じてつながっていた可能性があるのでないでしょうか。

乙巳の変を上記の如く捉えることによつて、乙巳の変後の大化改新の部分的な真実性と前期難波宮の意義が明確になります。

古田史学の会事務局長の正木裕氏は、大化改新の実態は九州王朝による常色（同時期の九州年号）の改革であろうと

考察しています。九州王朝(筑紫天皇家)

は、全国に散らばっていた渡来系氏族が自らの領地の呼称として用いていた評(こほり)をベースにして、評制という地方統治制度を作り上げるなど、中央集権的な国家体制の建設を始めたと考えられます。

なお、「隠された歴史」(4)で触れましたが、「評(こほり)」という名称については中国の正史である北史及び隋書に高句麗の行政区画としての「内評」「外評」、梁書に新羅の行政区画としての「塚評」という記述があります。又、日本書紀にも継体二十四年条に任那の「背評」(せこほり)という読み方も附記)とあり、朝鮮半島の行政区画の呼称であったことは明白です。「隠された歴史」(4)では、評(こほり)制は蘇我氏が渡来系氏族を全国的に配置したことによって準備されたもので、九州王朝の制度ではないと考察しましたが、九州王朝が蘇我本家を滅ぼしてその遺産を引き継いだということであれば、九州王朝が行政制度としての評制を確立したということになります。

また、蘇我本家を滅亡後、孝徳・中大兄等の近畿勢力は、後期九州王朝(筑紫天皇家)の王を近畿に迎えました。これが前期難波宮建設の意義です。この時点で九州王朝は難波を都とした倭国王朝に変貌したと考えられます。

## プロパガンダに騙されるな ―学び直そう戦争と憲法の歴史(五)

成瀬 和之

参議院選挙の結果改憲勢力が三分の二を超えました。岸田政権は今後三年間衆議院を解散しない限り国政選挙がない期間を迎えます。岸田政権は憲法改正の「黄金の三年間」としたいのでしょうか、私たちにとっては「危険な三年間」です。

第一ボタンをかけた間違えると、次々に第二ボタン、第三ボタンと掛け間違えます。そして間違った認識からは間違った判断、選択が起こります。歴史を振り返り、「第一ボタンの掛け間違い」がなかったのか考えていきましょう。

自衛隊日報問題を覚えていますか？自衛隊海外派遣部隊がイラクや南スーダンで日報を取りまとめていたにもかかわらず、防衛省・自衛隊が日本国民や国会に対してその存在を隠蔽していた問題です。「ない」としてきた自衛隊南スーダン派遣部隊の日報が、統合幕僚本部に電子データとして残っていることが二〇一六年二月二六日に判明しました。

二〇一七年七月二八日、稲田防衛大臣は引責辞任し、陸上自衛隊が日報を開示せずデータを削除したとし、特別監察結果を公表、組織的な隠蔽を認定しました。

ところが、二〇一八年四月二日、小野寺防衛大臣は、前年の国会で不存在と答弁していた自衛隊イラク派遣時の陸上自衛隊の日報のベ三七六日分約一四〇〇〇ページが見つかったと発表しました。

もし、稲田防衛大臣の時に安倍政権が徹底的に探すよう指示していれば、イラク日報など、その後の『隠蔽の連鎖』は起きていなかったでしょう。

イラク、南スーダンの両日報からは、自衛隊が「殺し、殺される」危険にさらされていた「戦場の真実」の一端が浮かび上がっています。安保法制Ⅱ戦争法に基づく「駆け付け警護」などの新任務を実践させようと、南スーダンなどでの「戦闘状態」を隠そうとした安倍政権のウソにウソを重ねた責任は重大です。

さて「明治一〇〇年」「明治一五〇年」と政府・自治体が祝賀行事を行い、司馬遼太郎に代表されるような「明治は栄光の時代、昭和前半は汚辱の時代」などといった主張が広げられてきました。けれども、はたして明治以降の日本で、日本の朝鮮侵略の歴史について、日本の政府や軍部という公権力が実際にしたことや隠し、ウソの話を広げてきたことはなかったのでしょうか？

ジェラルド・カーティス米コロンビア大学教授は、二〇一四年一月六日付の『琉球新報』で、次のように言っています。

どの国にも他国に誇れない歴史がある。米国人はインディアン虐

殺や黒人差別、ベトナム戦争を誇れない。だがいま学校で教えている。近年歴史を直視し次世代に継承する重要性が強く意識されるようになった。日本はこの点で遅れている。「自分が誇れない過去を認めることにプライドを持つ。」それが助言だ。

未来を誤らないためには歴史に学ぶことが必要です。傾聴に値する言葉ではないでしょうか？

次回は「第一ボタン」に戻って、朝鮮への初めての武力攻撃である江華島事件から見ていきます。この時すでに政府の公式報告は書き換えられていたのです。



## 【15ページの文章の続きです】

### 俳句

土田 裕

向日葵の花咲く頃ぞウクライナ  
灯のあれば羽虫群れ飛ぶ避暑の宿  
炎天や顎より長き犬の舌  
究極の時短レシピや冷奴  
かなかなの鳴く刻を待ち浅酌す

影山 武司

凌霄の揺れて夕風立ちにけり  
思ひ出す父の口癖遠花火  
サイレンの音もひりひり油照  
錆浮きし庭の蛇口の灼けてをり  
百段の磴の踊り場風涼し  
落ち着かぬ子のゐる夏の書道塾  
ことごとく透き通りたる夏料理  
添へられしパセリの青き錫の皿  
匂ひから先に戴く鰻かな  
奔放に枝を撓らせ百日紅

### ○残照見事に

すり足で私を斬りに来たおんな  
敵の一人の小気味いい啖呵  
切手斜めに怒りを乗せて愚を乗せ  
て

眼裏の猿一匹は終身刑

右肩を下げて火の粉を避けていく

山倉洋子の修羅である。

残照見事生きるべし笑うべし  
美に添ってゆこうと決めた金使い

これらは、森田みつ子、進藤すぎのの句。  
また、岡田和子はうたう。

血がうすくならないように日に当  
たる

みずみずしくなるかと思ひ水を飲  
む

葬式であいそ笑いをしてしまふ

暴動の尻馬に乗るつもりあり

合掌しなくせに合掌と書いてお  
く

死んだあととは生きてる者にまかせ  
よう

ああ、

大いなる思想十七音になる

万感の思いをどのようにうたうか。それ  
をまたどう読むか。尽きることの無い世  
界である。

### 編集後記

SK生

▼芭蕉に「あかあかと日はつれなくも秋の  
風」という名句があるが、一日もはやく一  
陣なりともほっとできる涼風が吹かぬも  
のかと思うのだが一向に猛暑は去りやら  
ぬ。そんな暑さの中、今回も「芥川たより  
187号」を出すことができた。原稿を寄  
せていただいた多くの投稿者には感謝の  
一語である。

▼終わりの見えないコロナとロシアの侵  
攻によるウクライナでの戦争。酷暑にあえ  
ぐ毎日であっても気が滅入るニュースが  
続いている。中でも一ヶ月前に起きた安倍  
元首相の銃撃事件には驚かされた。政治家  
は「結果責任」であると言ってしまった。そ  
れまでだが、日本最長の期間にわたり首相  
を務めた人の死である。多くの日本人がさ  
まざまな思いを胸に抱いたことであろう。  
さっそくそれが川柳という形式で出た。い  
わく「利用され迷惑してる『民主主義』」

いわく「付度はどこまで続く、あの世まで」  
と。かなり強い毒を含みあまりにストレー  
トな物言いの川柳だとは言えるのだが、や  
はり某政党からの批判が相次ぎ、この川柳  
を載せた新聞社は平謝りに謝った。川柳撰  
者の処遇などその後の動きは何の報道も  
ないため一切不明である。

▼今の習近平体制の中国では難しいこと  
となっているかもしれぬが、清朝以前の中  
国では詩歌は政治・社会の反映であらねば  
ならぬとする「詩経」以来の伝統があった。  
時として強烈な為政者批判ともなったが、  
民衆の窮状も含めて彼らの思いを言葉に  
よって表現し為政者にそれを知らしめる  
ことが詩人の大きな役割であり、それをな  
した詩人は時代を超えて多くの人々から  
敬愛された。杜甫、李白、白居易みなそう  
である。今回の川柳をめぐる謝罪騒動に関  
して古い中国の時代に比して為政者への  
批判を表現することが「付度」によって自  
ら狭めていくのではと懸念する。

▼最近、目にした詩の中に次の言葉があっ  
た。「詩を生むほどの悲しみはあつてはな  
らないのに、詩は悲しむ者のためにな  
くてはならない」という矛盾（河津聖恵「ウ  
クライナの緑」）。詩には悲しみだけではなく  
喜怒哀楽の感情、そして愛、時には難解な  
思想や為政者への訴えさえも書かれる。  
「万葉集」以来、詩歌を愛し続けてきた我  
が国の人々が川柳も含めた韻文の表現活  
動に自ら門を閉ざさないように望みたい。



川柳読み歩き

川柳の三要素として伝統的に言われるものは、穿ち・軽み・滑稽である。分析すればそういうことになるのであるが、これだけではよく理解できない。要は、川柳は人間をうたうということ、人間に関わる事象現象を十七音字にうたうということである。深刻なことを軽く笑いにのせ、見過ごしそうな事象現象の本質を衝き、明日への勇気が湧いてくれれば他に言うことはない。生きているだけでもうけものだと実感し、うたえるだけでもうけものだと思う、それが川柳の世界だと思ふ。

しかし、実にさまざまな川柳が詠まれていることには驚くほかない。要らぬ解釈は止して紹介を試みる。作者や背景は言わない、言葉は読者にどう届くだろうか。

○時実新子―川柳一代女

凶暴な愛が欲しいの煙突よ  
人の世に許されざるは美しき  
行く末を激しく問いぬキリギリス  
妻を殺してゆらりゆらりと訪ね来  
よ

君は日の子我は月の子顔上げよ  
花火の群れの幾人が死を考える  
死に顔の美しさなど何としよう  
蛇の皮だけのこの皮わたしの死

恋成れり四時には四時の汽車が出  
る

○丸山貞春―句集『夜明け前』の  
器晩成

被害者にくることは無い時効の日  
冬の方が今年も好きになった夏  
損をした金額少し多く言う  
耳鳴りと分別出来ぬ蝉しぐれ  
飲みすぎぬように睡眠薬を飲む  
終着駅近付き棚の荷を下ろす

○いわゆる難解句

トルコ桔梗の青見せてから首しめ  
る  
耳たぶに穴あけるととき樹のにおい  
刑法に触れた六月の雨の父  
暮れていく途中へ落とすなまたま  
ご  
作者は順に、石田柘馬、同上、石部  
明、畑美樹である。これと対照的な  
のがいわゆる凡句。

血圧を気にしながらも飲んでい  
る  
お互いに労り合って夫婦坂

なぜつまらないか、新家完司氏は言  
う。

①みんなが言っていることではない  
か

②あたりまえではないか

③格言くさくないか

④安易な言い回しではないか

それでは難解句はどうか。氏は読み  
手の責任を言う。

①読み説く力が足りない

②感性から生まれた句を理詰め解  
こうとしている

そして次が作者の責任。

①伝達性を無視している

②難しい句の方が上等だと思ってい  
る

③想いも言葉も整理できていない句  
を出している

④二物衝撃の取り合わせが離れすぎ  
ている

読み手と書き手をつなぐにふさわ  
しい橋はやはり要るだろう。

○田頭良子―句集『もなみ抄』火を  
抱く女

火を抱いておんなは川をさかのぼ  
る

抱きついて谷の底まで落ちてやろ  
ころすかもその極限に人を恋い  
荒れた海見たい魔性が棲んでいる  
美しい手でつきおとすこともある  
初恋の人ええあきんどになりはつ  
た  
急に向き換えたりできないのが女

せつせつせあしたの道はきつと晴

○女姓像―母親型と不倫型

ついていてあげねば駄目な人と添  
い

年上の女とくぐるてつちり屋

いうまいとお好み焼を押えつけ  
妻だけが時世のせいにしてくれる

あほになつときなはれという母が  
あり

以上、順に古沢蘇雨子、菊沢小松園、  
岩井三窓、柴田午朗、西尾葉の句。

一方、当節の女性はどうか。

逢いにゆく雪崩の予感抱きながら  
雪崩する心を抱いて逢うている

福本清美、庄司登美子の句。一方、  
抑えて揺れる心もある。

子を産まぬ約束で逢う雪しきり  
夫じゃない人と行きたいフルム  
ン

森中恵美子、曾我悦子の句である。

【この後の文章の続きは14ペ  
ージにあります。】

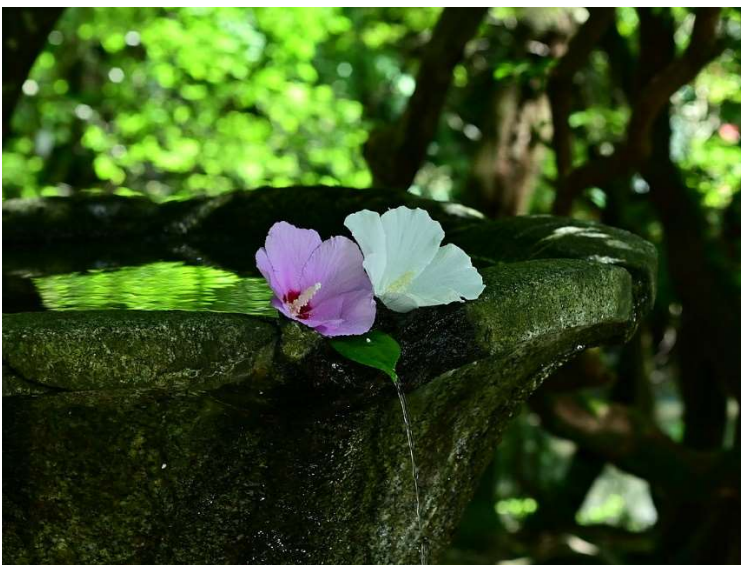
折々の花



カノコユリ



レンゲショウマ



法然院の夏・ムクゲ